

二六 血は復讐す

伊東一家を慘刑に處したのは兵部少輔の黨の爲めには極めて不利益であつた。成程七十郎の罪は重いに相違ないが、しかしながら七十郎が斯様な大事を計畫むに至つたのも、其元は彼等の不人望から起つた事である。それにたとへば七十郎の方に落度があるに於ては誰も知つて居ることである。思慮分別は勿論足りないが其志は立派なものであると云ふ一段に至つては誰も知つて居ることである。然るにかゝる壯士を慘くも斬罪にし、仙臺の名門たる伊東家に對して慘刑を恣にしたと云ふことは益々藩中の反對を招いた基である。全體里見老人や七十郎の様なものは藩中にふすぶつたる不平の火焰を吐き出すべき火山の孔口のやうなものである。其不平の火焰の天に滔るさまは如何にも恐ろしいけれども、かゝる火焰の上つて居る間は藩中の不平を泄らす口があるので禍も少い。然るに此火山の孔口を塞いでしまへば不平も聽えず議論も静まり、一寸考へれば上出來の様に思はるれども、實は一層不平の氣を強くするまでの事であつて、平生は七十郎等の處置を見て粗暴な事をする男であると嫌つたものも、扱其潔く刑場の露と消えた有様を見れば、七十郎が可愛くなつて兵部の一黨が悪くなるのは當然である。又斯様に兵部の一黨の威福を恣にするのを見れば何も恐ろしいことである。我々も若し此人々の機嫌に逆らへば何時かひどい目に遇ふに違ひないと藩中一同の者に思はせて、自然兵部一黨の貶黜を願ふやうな志を起すものも多くなつた。されば兵部の失敗はたしかに七十郎を殺したことから始まつたと云はねばならぬ。七十郎の血は決して無益にならなかつた。西洋の諺に血は讐を復すと云ふことがあるが、七十郎の血はたしかに讐を復した。今まで黙つて兵部の爲ることを見て居た大身の中にも、最早黙つて居る時機ではない、我々が政治に吻を容れると云ふことは常

一 　　ふすぶつたる 　　燻つたる。くすぶつてゐる。

は勿論ならぬことであるが、奸臣國に跋扈して社稷既に危き時は所謂貴戚の卿たる我々なれば座視すべきに非ず、これは一つ兵部、甲斐を懲らさねばならぬと思ひ悩んだ者もあつた。然し思ふ事と實行する事とは別であつて、大抵は一身の安全を思ふ者のみ故、公然反抗の色を現はすものはなかつた。

此時に例の涌谷の城主伊達安藝宗重が桃生郡の境の事から苦情を出して、此苦情が段々大きくなつて、終に安藝が兵部甲斐の不埒を柳營に訴へると云ふ大騒ぎになつた。今度の争論は表面から見れば境論のやうではあるが、其實安藝は境論の進行しつゝ、ある或程度に於て兵部黨を弾劾すべき好機會を捉へて、政治の戦場に猛進したのであつた。こゝに一寸安藝の人物を語らうならば、安藝の家の先祖は藤原秀衡の後裔であつて、其本姓は互理氏であつた。しかし伊達植宗の十二男兵庫頭元宗が互理氏の養子になつてから此家は伊達の血統になり、天正十九年に互理郡から遠田郡涌谷に所換になつた。其孫の定宗の時になつて初めて伊達の姓を許され一門に列したのである。伊達安藝宗重は即ち此定宗の二男であつて、始めは天童家の養子になつて天童甲斐と云つて居たが、兄が死んだので實家に歸り家を繼いで伊達安藝となつたのである。少年時代は随分あばれ者で、父兄にも迷惑をさせたこともあるが、年と共に立派な人物になつて、學問も出來、詩なども善く作つた。安藝の詩と云つて残つて居るもの、中に、

春江夜興

一堤垂柳綠 兩岸落花紅 不及茲時樂 何能語世豐

舟行春月下 人語水烟中 瓢酒傾猶好 箇情誰得同

と云ふのがある。位牌知行を貫つて威張つて居る馬鹿な大身とは違ふことが此詩だけでも分る。此人が遂に意を決して兵部の政治に弾劾の聲を揚げたのである。伊東七十郎の最後の詞は事實となつた。血は復讐を始めた。

二 貴戚 君主・諸侯の親戚。

三 藤原秀衡 平安時代末期の武將。奥州藤原氏第三代當主。

四 伊達植宗 陸奥國の戦國大名。伊達氏の第十四代當主。伊達氏の急激な勢力擴大に成功する。

五 春江夜興 次に試みに書下し文を掲げる。

一堤の垂柳綠に、兩岸の落花紅なり、茲の時に及んで樂しまずんば、何ぞ能く世の豊かなるを語らん、舟は行く春月の下、人は語る水烟の中、瓢酒傾くるも猶好し、箇の情誰か同じきを得ん。

六 位牌知行 先祖が功によつて得た俸祿をそのまま世襲すること。またその俸祿。輕蔑の意味で用ゐられる。